

あなたは「地の塩」、 「世の光」です!

CFNJ聖書学院学院長
鍛冶川利文師

「あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる

人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」マタイ 5:13 ~ 16



イエス様は弟子達に向かって、すでにあなた方は「地の塩」「世の光」であると宣言されました。この言葉は成熟したクリスチャンにではなく、まだ未熟な段階の弟子にむかって語られたものです。ですからこの言葉は神に従おうとするすべてのクリスチャンに向けて語られた励ましの言葉です。私達の役割は救われた瞬間から、この2つの面でこの世の中に神の栄光をあらわしていくことです。塩はクリスチャンのこの世に於ける消極的な面の役割を、光は積極的な面の役割を指し示しています。それではこの2つの役割を具体的に見ていきましょう。

塩の持つクリスチャンの5つの性質

1. 塩は自分ではなく他の物に対して味をつける。

(他者に対するクリスチャンの役割)

■塩は自分ではなく他の物に対して味をつけます。塩の役割はその塩気を自分以外の他者へと向けていくことです。その人本来の持ち味を引き出して、人を生かし人々を神へと導くことです。これは他者に対する役割です。

2. 塩は集まることによってより塩味が強くなる。

(教会に於けるクリスチャンの役割)

■塩は集まることによってより塩味が強くなる。塩気は量が多くなればなるほど増します。これはクリスチャン達が共に祈る事の大切さを教えています。

3. 塩は形にこだわらず水に溶けやすい。

(この世に於けるクリスチャンの役割)

■塩は形にこだわらず水に溶けやすい。塩の性質はすぐ溶けやすく浸透しやすいことにあります。これは儀式や形式にこだわることなく、柔軟な心で神の御心を行っていくクリスチャンの性質をあらわすものです。

4. 塩は腐敗を防ぎ保存の役割をする。

(罪に対するクリスチャンの役割)

■塩は腐敗を防ぎ保存の役割をする。塩の役割は、この世の中が罪によって麻痺し良心の感覚を失いかけた状態を目覚めさせ墮落していくのを防ぐことにあります。

5. 塩は人々に渴きを起こさせる。

(義に対するクリスチャンの役割)

■塩は人々に渴きを起こさせる。塩はのどの渴きを起こさせます。それと同じようにこの世の人々に神に対する渴きを覚えさせるものです。

光の持つクリスチャンの4つの性質

1. 光は人々を照らす。

(この世に対するキリスト者の役割)

■光は人々を照らし、暗闇を照らします。これにより人々の目は明るくなります。

2. 光は悪い菌などを殺す。

■殺菌・消毒など。(罪に対するクリスチャンの役割)

3. 光は危険をあらかじめ示すものです。

(将来に対するクリスチャンの役割)

■光は危険をあらかじめ示すものです。車のヘッドライトのように近い将来を照らします。

4. 光は人々に情報を素早く伝える。

(真理に対するクリスチャンの役割)

■光は人々に情報を素早く伝える。灯台の光のように、また現代の光ファイバー通信のように真理を人々に伝えます。

塩から光に、この順番が大切です。私達クリスチャンは、いきなり光となる事を求めるのではなく先ず塩としての人生を着実に歩む事です。それは、地道にひたむきに、そして誠実な歩みです。それを続けるならやがて光として輝くことができます。初めから私は光ですというような歩みは、やがてボロがでるでしょう。ですからあまり若いうちに表舞台に出ようとするのではなく、まず塩としての地道な歩みを心がける事です。そうするならやがて必ず時満ちて、神様が光として輝かせてくださるのです。焦らないで誠実に歩みましょう！しかし、だからといっていつまでも自らの役割を果たそうとしないならやがてその力を失ってしまうこともありえます。人がいくら立派な家業の家に生まれたとしても、いつま

でもその家業を継ぐ気がないなら、いずれその資格を失ってしまうように、私達クリスチャンも塩けや光を失うこともありえるのです。塩が塩けを無くしてしまう事はとても悲しい事です。かりに新聞紙はそれを読み終わったとしても古新聞になります。食べ残しはやがて堆肥になります。又、家具や電気製品はリサイクルすることが出来ます。しかし、もしクリスチャンがその役割を失うなら、この世における存在価値がなくなります。なぜなら私達クリスチャンの存在価値は、この世の中に於いて塩や光であり続ける事において認められるからです。

第二次世界大戦の時、タイ国境で日本軍により、捕虜による強制労働でクワイ川という川に橋が架けられました。これは「戦場に架ける橋」という有名な映画にもなりました。この映画では捕虜のイギリス兵は誇り高い姿でしたけれど、実際にはあまりに過酷な強制労働の為、イギリスという国家のプライドや民族としての誇りをもはぎ取られて、やがては飢えの為に日本軍の食べ残した味噌スープを犬や狼のように奪いあう、そんな姿にまでイギリス兵達は追い込まれます。自分だけでも何とか生き延びたいと互いに憎しみあい、奪いあい、やがては動物と化していく悲惨な状況がそこには繰り広げられました。あまりに過酷な状況の中に人が追い込まれていくならば、人間はいったいどのようになっていくのだろうか。それでもなおも人は人としての尊厳を持ち得るのだろうか？そんな絶望的な状況でイギリス兵達の望みは奪われていきます。もう最悪と思われたその時、1つの事件がおこります。それを通して人々の心に不思議な変化がはじまっていくのです。

それはある日、強制労働の後、スコップの数が一本不足しているのが判明し、誰かが盗んだと疑った日本兵は気が狂わんばかりに怒りながら、その日に働いた者達を整列させ「この中にそれを隠している者がいるなら即座に前に出るように！」と命じます。そして「もし誰も申し出ないなら、

全員皆殺しにする！」と叫びました。そこには重苦しい沈黙が流れました。時間が経ってもだれも前に出ません。やがて怒りが頂点に達した日本兵はそれを実行しようとしています。しかしその瞬間、一人の若者が名乗り出て前にでました。「私がやりました。」それを聞いたこの日本兵は、この若者を叩き殺してしまいます。そしてそのことはそれで治まりました。しかし、その事件の後、重大な事が分かりました。それは後でもう一度そのスコップの数を数え直してみると、何と数があったのです。それは日本兵の数の数え間違いでした。その若者はなんと皆の為に自らが犠牲となったのです。その事実は瞬く間にその収容所のなかに広がっていき、やがて人々の心に変化をもたらしました。この事件は捕虜たちに人間としての生きる望みを投げかけていきました。そして、やがてそこから神の愛が広がっていくのです。皆が神を求めはじめました。その後収容所内には人を思いやる心が回復し、苦しい中でも互いに助け合うようになっていきます。それは敵である日本兵にも及びます。そして教会が設立され、収容所の中には讃美歌が流れ、死から命へと変えられていきます。やがて戦争は終わり捕虜たちは解放されます。その帰国途中、無惨な姿の負傷した日本兵に出くわします。敵でありひどい仕打ちをしたその負傷兵を誰も助けようとはしません、しかし、その捕虜達は日本兵に水や食料を与え傷口に薬を塗ってあげます。ここに神の愛の力が死の力に打ち勝っていくのです。「あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」マタイ 5章 16節 (『クワイ河収容所』(筑摩書房)アーネスト・ゴードン著)

私たちは地の塩、世の光とされています。そのようになると頑張りというより、既に私たちの存在そのものが塩であり光であることを認めましょう。そしてイエス様も、又、同時にこの世の人たちも私達に塩の役割と光の役割を発揮するよう期待しているのです。■